

ドイツにおけるロシア語話者とロシア語継承に関する研究
—移民第二世代のロシア語学習状況を中心に—

A STUDY OF RUSSIAN SPEAKERS AND RUSSIAN AS A HERITAGE LANGUAGE IN GERMANY: THE RUSSIAN LEARNING SITUATION OF SECOND-GENERATION MIGRANTS



<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2022-22-172-177>

佐々木 優香 SASAKI Yuka

修士（学術），筑波大学人文社会系，特任研究員

yk.sasakiway24@gmail.com

ABSTRACT

This paper aims to investigate Russian as a heritage language in German society through language usage at home as well as the opinions on learning from second-generation migrants who come from Russian-speaking countries. There is a large community of Russian speakers in Germany; the number of people with origins in the former Soviet Union who live in Germany is the third largest migrant groups.

This study is based on an analysis regarding Germany's integration policy and interviews with second-generation migrants. Looking at the case study of the heritage language education in North Rhine-Westphalia, the number of heritage language classes is recently increasing. However, there were the arguments concerning the continuation or abolition of the mother tongue education in the 1960s. Russian classes were introduced in a historical context until the 1990s but after the 2000s, they were placed in the context of the migration integration policy. Furthermore, it is noteworthy that heritage language classes are being integrated into the regular school system.

The interviews revealed the following three points. First, the language usage of the second-generation migrants depends heavily on the German levels of their families. Second, there are some students who do not learn Russian, although they live in a Russian environment. Third, different kinds of learning styles influence the significance of heritage language learning. Students in the Russian classes find various motivations to learn Russian, for example, not only family influence, but also that for academic achievement.

キーワード

移民第二世代、継承語教育、ドイツにおけるロシア語話者

second-generation migrants, heritage language education, Russian-speakers in Germany

はじめに

1990年代以降、ドイツ国内に居住する旧ソ連に出自をもつ人々の数は約200万人におよび、トルコやポーランドに次ぐ大きな移住者集団を形成している¹。旧ソ連に出自をもつ人々は、アウスジードラーという法的地位をもとに移住したドイツ系の帰還移民や、ユダヤ系の避難民がその中心を成している。特に前者は、ドイツの血縁を移住の根拠としていたことから、ドイツ入国後は自動的にドイツ国籍が付与され、他の移住者集団とは異なり、ドイツ政府から手厚い支援を受けることができた²。ただしそうした待遇は、彼らが当然のようにドイツ語を話し、ドイツ社会に適應することを暗黙のうちに要求する

¹ Bundesverwaltungsamt, (Spät-)aussiedler und ihre Angehörigen - Zeitreihe 1992-2020 Herkunftsstaaten -ehemalige Sowjetunion (<https://www.bva.bund.de/> 最終閲覧日：2022年1月29日) / Statistisches Bundesamt, 2020:

Bevölkerung und Erwerbstätigkeit Bevölkerung mit Migrationshintergrund – Ergebnisse des Mikrozensus 2019 –参照

² Panagiotidis, Jannis, 2021: Postsowjetische migration in Deutschland. Beliz Juventa, Weinheim, p52 参照

ものでもあった³。実際のところ、旧ソ連に出自をもつ人々の多くは家庭内でロシア語を使用しており、かれらが母国とドイツの文化の狭間に置かれていた様相が垣間見える。近年では、アウスジードラーとしてドイツに移住した人々の子ども、いわゆる移民第二世代が増加している⁴。

本稿では、ドイツ社会でのロシア語継承について、ドイツで生まれ育つ旧ソ連に出自をもつ移民第二世代のロシア語学習状況を通じて考察することを目的とする。その際、移民の社会統合という政策的視点と、旧ソ連に出自をもつ移民第二世代に対するインタビュー調査の結果を踏まえた当事者の視点との両者をもとに、ロシア語継承の現状について考察する。

上記の目的のもと、第 1 節では、旧ソ連出身アウスジードラーのドイツへの移住について概観したうえで、旧ソ連に出自をもつ人々の言語使用に関する先行研究を整理する。第 2 節では、公立学校での継承語教育に対する取り組みに焦点を当てる。第 3 節では、移民第二世代のロシア語学習状況に関するインタビュー調査の結果から考察する。ロシア語授業に参加する生徒と、そうでない生徒を対象としたインタビュー調査からは、ロシア語学習へ方向づけられる要因が明らかとなった。

1. アウスジードラーの移住背景と言語使用状況

アウスジードラーとは総じて、ドイツから旧ソ連や東欧地域に移住した者であり、ドイツ系であることから居住地で差別的な扱いを受けたことを理由に、ドイツに避難してきた者を指す⁵。ドイツへの移住後、アウスジードラーのドイツ社会への適応は容易なものではなく、かれらはしばしば「故郷の中よそ者」と名づけられた⁶。その理由には、不十分なドイツ語能力や古い訛りのあるドイツ語を話すことにくわえ、異なる文化的背景があげられる⁷。出身国ではドイツ語の使用が制限されており、学校でもロシア語の使用が義務化されていたことから、若い世代になるほどドイツ語とは疎遠となる傾向にある⁸。

アウスジードラーは家族間でロシア語を使用し、ロシア語を継承してきたことがうかがえる。2016 年に実施された、ドイツ居住の旧ソ連に出自をもつ人々を対象とした言語使用に関する調査では、調査対象者 (=606 名) のうち 42% が家庭内で主にロシア語を使用していることが明らかとなった⁹。また、32% がドイツ語とロシア語の併用、24% が主にドイツ語を使用しているという結果であった。つづいて、Anstatt (2011) による幼少期に旧ソ連地域からドイツに移住した経験をもつ 15 歳~18 歳の若者 17 名を対象とした調査では、ドイツに移住した年齢が 10 歳未満の者はドイツ語を優勢言語とする傾向があると指摘される。同時に、ロシア語の能力に関わらず、対象者の多くがロシア語を母語とみなし、ロシア語を家族の言語として重要なものと位置づけていた¹⁰。これらの先行研究から

³ Panagiotidis, Jannis, 2021: Postsowjetische migration in Deutschland. Beliz Juventa, Weinheim, p52 参照

⁴ 本稿では、旧ソ連からの移住経験をもつアウスジードラーを第一世代、ドイツで生まれ育つアウスジードラーの子ども、および幼少期に移住しドイツで教育を受ける者を移民第二世代としている。

⁵ 近藤順三, 2002 『統一ドイツの外国人問題：外来民問題の文脈で』 木鐸社, p324 参照

⁶ Ipsen-peitzmeier/Kaiser, 2006: Zuhause Fremd – Russlanddeutsche zwischen Russland und Deutschland, Bielefeld, transcript Verlag, p13 参照

⁷ Rosenberg, Peter, 2006: Die Sprache der Deutschen in Rußland, Europa Universität Viadrina Frankfurt, p6 参照

⁸ Meng, Katharina / Ekaterina Protassova, 2016: *Deutschen und Russisch : Herkunftssprachen in russlanddeutschen Aussiedlerfamilien*, Online-Publikation: Leibniz-Institut für deutsche Sprache, p19 参照

⁹ Boris-Nemtsov Foundation for Freedom, 2016 (<https://nemtsovfund.org> 最終閲覧日：2022年1月29日)

¹⁰ Anstatt, Tanja, 2011: Russisch in der zweiten Generation. In: Eichinger, M. Ludwig/ Plewnia, Albrecht/ Steinle, Melanie (Hrsg.): *Sprache und Integation – Über Mehrsprachigkeit und Migration*, p110-117 参照

は、旧ソ連に出自をもつ人々の中でもロシア語を第一言語とし、ロシア語への忠誠心を抱く人々が多くいることが分かる。

では、近年ドイツで生まれ育つ移民第二世代が増加する中で、ロシア語に対する意識や使用状況はいかに変化しているのだろうか。この問いを踏まえ第2節以降では、これまで十分に扱われてこなかったドイツ生まれの旧ソ連に出自をもつ移民第二世代に焦点を当てる。くわえて、ドイツにおけるロシア語学習機会の展開を追うことで、今日のドイツにおけるロシア語の継承語教育の状況を明らかにする。

2. ドイツの公立学校における継承語教育

ドイツの公立学校では近年、継承語教育¹¹の導入が積極的に行われている。ドイツ全16州のうち、ザクセン・アンハルト州とチューリンゲン州の2州をのぞくその他の州では、様々なかたちで継承語教育が実践されている。異なる実践方法として、州の管轄と出身国の領事館が管轄するものに大別することができる¹²。以下ではとりわけ前者に着目し、公立学校における継承語教育の展開を追う。また、ドイツは文化高権により、教育に関する事項は州の管轄となっているため、教育制度はもとより継承語教育の実践状況も州によって異なる。こうした事情を踏まえて、本稿では、アウスジードラーが多く移住した地域であるノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NRW州と記す）を調査対象地域としている。

添付資料表1によると2019/2020年度、同州では23言語の継承語のクラスが設けられており、各言語の授業に参加する生徒の数は10万人を上回る。なかでもロシア語の受講者数は、トルコ語、アラビア語に次いで3番目に多く、かつその数は年々増加していることが分かる。

近年の継承語教育の発展は、欧州評議会の複言語主義や移民の社会統合政策から少なからぬ影響を受けている。こうした文脈の中で展開する継承語教育は、ドイツの学校教育の中でその位置づけを確立しつつある。例えば、継承語の授業が他の外国語科目の補完的役割を担い、高校卒業試験であるアビトゥア科目として選択することが可能な学校も散見される¹³。

このように近年では学習環境の整備に注力される継承語教育であるが、現在に至るまでにはさまざまな議論が繰り広げられてきた。1964年に常設文部大臣会議で「外国人子弟のための授業」が制定されたことをきっかけに、外国人にも就学義務が課されたことにくわえ、外国人の子どもの母語教育が促進された¹⁴。しかし、当時の母語教育¹⁵の目的はもっぱら、子どもの帰国後の教育接続のための母語能力の維持であり、言語の選択肢はトルコ語、イタリア語、ポーランド語などの外国人労働者協定を結んでいた国の言語に限定されていた。他方、教育現場ではドイツ語能力が不十分な外国人の子どもに対するドイツ語支援が喫緊の課題となっていた。1960年代から70年代にかけて、ドイツの教育現

¹¹ ドイツ語では *Herkunftssprache* (出自言語) が用いられることが多い。出自言語と継承語は完全に同義とは言えないが、本稿では両親の母語を子どもに継承するという意味で便宜的に「継承語」を用いる。

¹² *Mediendienst Integration, 2020, Wie verbreitet ist herkunftssprachlicher Unterricht?*, p4 (<https://mediendienst-integration.de/> 最終閲覧日: 2022年1月29日)

¹³ 佐々木優香, 2019「ドイツにおける移民の第二世代と出自言語教育に関する一考察: ロシア語授業の事例から」『移民政策研究』, 第11号, p178 参照

¹⁴ 各州文部大臣会議ウェブサイト「Zur Geschichte der kultureministerkonferenz 1948-1998」参照 (<https://www.kmk.org/> 2022年1月29日最終閲覧日)

¹⁵ 1997年に従来の「母語授業 (*Muttersprachlicher Unterricht*)」から「出自言語授業 (*Herkunftssprachlicher Unterricht*)」へと名称が変更した。佐々木, 2019, p176 参照

場が直面していた課題を天野（1997）は、ドイツへの統合と出身国への再統合という「二重の課題」と称した¹⁶。その後、外国人労働者とその家族の定住化が進むと、2つの異なる目的をもった課題設定は修正を迫られ、母語教育継続に対する議論が活発化した¹⁷。今日における各州の継承語教育をめぐる実施状況は、上述のような議論の影響を受けていると言える。いくつかの州では、財政的な理由にくわえ、母語教育を受ける児童生徒の帰国率が低いという実態から、母語教育の縮小が試みられた。

ただし、こうした実社会での母語および継承語教育をめぐる議論を尻目に、継承語授業の意義について学術的な知見が多く蓄積されてきた点は看過できない。紙幅の関係上、各研究の詳述は避けるが、代表的なカミンズ/中嶋（2011）の研究では母語・継承語の学習意義が指摘される¹⁸。

ロシア語に目を向けると、アウスジードラー支援と移民の社会統合という2つの異なる文脈によるアプローチがなされていたと考えられる。具体的には、1990年代の教育現場では、若年のアウスジードラーに対するさまざまな教育的措置が講じられた。かれらはドイツ語ではなくロシア語で国語の試験を受けることを許容され、また、外国語の選択科目である英語、フランス語、ラテン語に加えて、ロシア語が選択肢に含まれるなど、アウスジードラーという背景に配慮した特別な対応がなされてきた¹⁹。その後、ロシア語が継承語教育の一環として位置づけられるようになったのは、2000年代に突入してからである。それについて2つの理由を指摘したい。

一つ目に、戦争帰結処理法の制定があげられる。これにより1993年1月1日以降に出生した者はアウスジードラーの地位が継承されないことが決定した。二つ目に、2005年の移民法の制定があげられる。これを機に、これまでのアウスジードラーに対する統合支援は終了し、アウスジードラーは他の移民と同様の扱いを受けることとなったのである²⁰。

3. 移民第二世代のロシア語学習

本節ではまず、移民第二世代のロシア語学習の実態について現地調査をもとに明らかにする。移民第二世代のロシア語学習に対する意識とその環境要因についてインタビュー調査の結果をもとに考察する。現地調査は2018年3月から7月にかけて、NRW州のロシア語授業2クラスと、旧ソ連に出自をもつ生徒が多く在籍する私立の総合制学校（A校）で行った。ロシア語の授業と通常の学校に在籍する生徒の両者を調査対象とすることで、移民第二世代が置かれる多様な言語環境、ならびに言語に対する意識を聞き出すことをねらいとしている。

インタビュー回答者リストは添付資料にある表2と表3に示される通りであり、ロシア語授業とA校というインタビュー実施場所ごとにリストを分けている。ロシア語授業に参加する生徒（グループ1：表2参照）は、通常在籍する学校とは別に、放課後にロシア語授業が開講される最寄りの学校へ通う者もいる。当然のことながら、かれらは両親または自らの選択により、ロシア語を学ぶ環境下にある。他方、A校の生徒の中には旧ソ連に出自をもつにもかかわらず、ロシア語学習に方向づけられない者が多く見られる

¹⁶天野正治編, 1997『ドイツの異文化間教育』玉川大学出版部, p46 参照

¹⁷立花有希, 2018「教育における多文化共生：ドイツにおける母語教育の展開を題材として」宇都宮大学国際学部編『多文化共生をどうとらえるか』, p111 参照

¹⁸カミンズ, ジム著/中嶋和子訳著, 2011『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版部, p61-70 参照

¹⁹BASS 13-61 Nr.1 (1992)/BASS 13-62 Nr. 6.2 (1985) 参照

²⁰Deutscher Bundestag 2016, Russlanddeutsche in der Bundesrepublik. Zahlen, Rechtsgrundlagen und Integrationsmaßnahmen. WD 3/-3000-036/16 参照

(グループ 2: 表 3 参照)。ただし、A 校では外国語の選択科目としてロシア語授業が設けられており、この授業に参加したことのある/参加している生徒が数名含まれている。この両グループを対比させることで、ロシア語学習者ならびに非学習者の家庭での言語使用状況とロシア語に対する意識の相違を明示する。以下にインタビュー調査から得られた情報の要約を記述する²¹。

3.1 家庭での言語使用状況

両親の出身国を見ると、旧ソ連の中でもその出自や、両親の出身国の組み合わせが実に多様であることが分かる。また、回答者の大半がドイツ生まれであり、グループ 1 のうち 3 名が自身の移住経験を有する。家庭内でロシア語のみを使用するという者は限定的であり、特にグループ 1 ではドイツ語とロシア語の両言語を使用する者が多い。グループ 2 では、家庭内でドイツ語のみを使用している者が大半を占める。ただ、親子間での会話はドイツ語のみで行う者でも、ロシア語を全く耳にする機会を持ち得ないという者は少ない。つまり、親子間では主にドイツ語を使用しているにもかかわらず、多くの者が両親同士の会話などでロシア語に触れる環境下にあると推察される。

また、ロシア語を使用する頻度や場面も多様である。例えば、「両親とはロシア語で話すが、弟妹はロシア語が話せないため、ドイツ語で話す (B1 さん)」、「基本的にはドイツ語だが、会話の途中で父親がロシア語を話すことがあるため、その時はロシア語で返す (J3 さん)」、「学校からの書類について親に説明する際は、ロシア語に訳せないためドイツ語で話す (I1 さん)」などの意見が聞かれた。

3.2 ロシア語に対する意識とロシア語学習意義

言語に対する意識を理解するため、「ロシア語を話すことは重要か」という問いを設定した。ロシア語を学んでいる者の全員が重要であると回答した。その理由には家族とのコミュニケーションを第一にあげる者が多い。一方で、グループ 2 の大半はロシア語を話すことの重要性を感じていないようである。その背景には両親とドイツ語でコミュニケーションを取っていることがあげられる。また、ロシア語を外国語として位置づけ「難しい (C1 さん)」、「自分には向いていない (G3 さん)」と判断する者もいた。

つづいてロシア語を学ぶ理由として、上述のような家族的意義だけではなく、「学習の証明書をもらうため (A2 さん)」や「仕事に活かすため (A1 さん、A2 さん、B1 さん)」という理由があげられた。一般的に、継承語教育はその学習目的や意義によっては継続的な学習が難しいと言われている²²。だがドイツでは、継承語の授業でも成績評価がなされることから、生徒が継承語学習の意義を将来の進学や就職と結びつけて現実的に思考することができるのではないかと推察される。

本調査結果からは以下の 3 点が明らかとなった。一つ目に、移民第二世代の家庭内言語使用状況は、両親をはじめ親戚や祖父母などの家族のドイツ語能力に依拠している。会話の相手に応じて言語を使い分けることにくわえ、会話の内容によってもドイツ語とロシア語を併用していた。くわえて、特にアウスジードラーの背景をもつ親は、十分なドイツ語を習得しており、基本的には親子の会話でドイツ語を用いているケースが多い。

²¹ ロシア語授業での調査結果については佐々木 (2019) でまとめている。本稿では、佐々木 (2019) を援用しながら、A 校での調査結果を比較対象として用い考察を加えている。

²² 中島和子, 2017 「継承語ベースのマルチリテラシー教育: 米国・カナダ・EU のこれまでの歩みと日本の現状」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』, p4-5 参照

二つ目に、ロシア語圏に出自をもち家庭内でロシア語を耳にする者であっても、必ずしもロシア語学習に方向づけられないケースがあることが分かった。そのような子どもは、家庭内や学校でもドイツ語を第一言語としているため、ロシア語能力の保持・向上に対する意義を見出しにくい状況、あるいは不要という考えに至る状況にあると言える。

三つ目に、ドイツには継承語教育、外国語選択科目、コミュニティによる教室などさまざまなロシア語学習機会が増えつつあることから、そうした学習環境の相違がロシア語学習者の学習意義に影響を及ぼしていることが考えられる。具体的には、継承語教育の一環でロシア語を学ぶ生徒は、親の意向によって小学校低学年から継続してロシア語授業に参加する者がインタビュー回答者の大半を占める。つまり、ロシア語は学習者とその家族をつなぐ言語としての認識が強い。一方、学校での外国語選択科目としてロシア語を学んでいる/学んでいた経験のある生徒にとって、ロシア語学習の選択は自身の関心によるところが大きく、かつ外国語として認識している様相がうかがえた。ただし、そうした学習環境の相違に関わらず、ドイツでは継承語授業が通常の外国語科目に統合されることにより、家族的な意義にくわえて進学や就職を学習目的として据える生徒の存在も見受けられる。また、そうした多様な学習の意義づけは継承語の継続的な学習を促進することが期待される。

おわりに

1990年代、教育現場におけるロシア語はもっぱらアウスジードラーの言語支援としての歴史的な要素が強かったが、2000年代以降はとりわけ継承語教育の枠組みの中で発展的にロシア語授業が行われている。また、NRW州では公立学校において継承語教育が通常の教育課程と有機的な関連をもち、評価の対象となっている点が注目値する。こうした継承語の学習環境の整備によって、継承語学習者は家族のコミュニケーションツールとしての言語学習目的に留まらないさまざまな学習意義を見出すことができる。

本研究ではロシア語学習者と非学習者の相違点に着目し、その環境要因の考察を試みた。その結果、学習者と非学習者の間ではロシア語に対する意識の大きな違いがあることが分かった。そうした意識の違いは、両親のドイツ語能力、親の意向、居住地域にロシア語クラスを設ける学校があるか否かといった要因があげられる。他方で、アウスジードラーという歴史的な観点からは、アウスジードラーの背景をもつ親世代のドイツ滞在期間が比較的長く、十分なドイツ語能力を身につけていることが特徴である。こうした状況が旧ソ連に出自をもつ移民第二世代の言語学習選択の多様性に影響を及ぼしていると言える。

近年では日本でも外国人の子どもの増加をうけ、母語・継承語に注目が集まっているが、ドイツにおけるロシア語授業からは以下のような示唆が得られるだろう。外国にルーツをもつ子どもを、その出自のみを判断基準として継承語の学習環境におこうとするのではなく、一人一人の言語的経験や言語環境を理解することが継承語教育を実践するうえで、正確なニーズの把握につながる。その中には「学ばない」という選択肢もあることを念頭におかなければいけない。他方、「学びたい」という者に対して、継承語授業の受講が評価されるなど、体系的な継承語学習に関する枠組みの導入など、学習環境の質的な向上が求められる。

*本研究(の一部)は、公益財団法人 松下幸之助記念志財団による研究助成を受けたものです。